

進路ガイダンス・レポ

羽尻 嵩

この会が大阪の「シニア自然大学校」の地域組織部の1つとして立ち上げられた経緯があり、本年も1月19日(日)に大学校の修了者入会勧誘のための「進路ガイダンス」に参加しました。

開催場所は例年と同じ鶴見緑地花博記念ホールでしたが、年々出展が増えて手狭なスペースでしたので、工夫して出店ボックスを作りました。

壁には会旗と各グループ・班での活動やイベントでの子供たちの活動を示す写真16枚を模造紙に張り、机にはリーフレットや会報や鹿の形の折紙などを、机前には会長が会員の活動を描かれた絵を置きました。

午後1時40分、勧誘開始。

会場には、関西で活動されている50以上のボランティアグループが出店されていて、ボックスを見て回る人も多く、和やかな雰囲気でした。



午後3時半、ガイダンス終了。

話を聞いていただいた方は、ならやまに実習に来ていただいた方たちがほとんどで、特に熱心に話を聞いていただきました。

後日、大学校より入会希望者の連絡が入りました。会での里山整備活動を共に頑張りましょう。

午前中から来ていただいた小島さん、桜木さん、事前に写真など準備物を用意していただいた辻本さん、ありがとうございました。

ひとやすみ

沢村賞ってもう無理？

千載 輝重

今年もプロ野球が始まる。名将、野村克也も逝った。データ野球で話題を呼んだが、やっぱりこの時代の選手は「ど根性魂」で云々される方がふさわしい。特に投手はそのように思う。でもそんな怪物を期待することも難しくなっている。

15勝、150奪三振、10完投、200投球回数、25試合登板、勝率6割、防御率2.50以下・・・沢村賞選出にあたって参考にされる選考基準だそう。去年は19年ぶりに該当者なしに終わった。中でも10完投、200投球回数は遠く及ばず、誰もいなかった。投手の起用が先発、中継ぎ、抑えの分業となった最近の野球では沢村賞はもはや望むべくもないのではないかと。大リーグでも100球を越えると選手の代理人がクレームをつける。救援投手が先発して短い回を投げ、その後に本来の先発投手が出てくることも多くなっている。なんだか寂しいが、昔ながらの先発投手の投げ合いを期待するのはもう無理なのか。プロ野球ファンが減少傾向にあるのはこうしたことも関係しているのかもしれない。

でも、力のある投手なら完投することの達成感が味わえないことに苛立ちを覚えるのではないかと。勝利だけにこだわるゲームにはがっかりさせられるファンもいるだろう。スポーツに打算を持ち込むと興ざめである。成長過程の若者を守るための工夫は必要だと思うし、昔ながらの精神論が強くと出過ぎるとパワハラなどにも発展することもあるので、あまり偏った考えは禁物である。でも、日本のスポーツはやはりどこかでウェットなところがあってほしい気がする。

流行語大賞「ONE TEAM」が感動を呼んだのも、そんな背景が無関係ではないかも。ちょっと無理するのも若者の特権である。

懐かしい・・・

